



第7871号

2023年8月15日(火)

ウクライナがクリミア奪還へ戦う時

エコノミスト 西谷 公明

◆独立後、タタール帰還促進

ロシアがウクライナ侵攻を開始して2度目の夏。ウクライナの反転攻勢は難航し、戦火はクリミアと黒海へ広がっている。

実はクリミアにおいて、ウクライナ系住民は少数派である。ウクライナ独立時、クリミアでは住民の7割近くがロシア系で、ウクライナ系は2割強を占めるだけだった。もともとロシア色の強い土地柄で、独立を問う国民投票(1992年12月実施)で賛成したのは、54%と全土で最も低かった。

独立後、ウクライナ政府はロシア系住民の発言力を弱めるために、クリミア・タタールの帰還を促す政策を取った。この地のタタール(トルコ化されたクリミア・ハン国の末裔たち)は、第2次世界大戦中にナチスに味方して赤軍と戦ったかどで、戦後シベリアや中央アジアへ強制移住された。その数は100万人近いともいう。

◆トルコのウクライナ支持理由

30年前の夏、私は初めてクリミアを訪れた。ロシアもウクライナもクリミアが欲しいのはヤルタがあるからではないか。そう思えるほどにヤルタは美しいところだった。ヤルタ会談の開かれたリバディア宮殿は、海を見下ろす高台の斜面にあった。黒海は静かで鏡のように光っていた。半島の草原のあちこちで、故郷へ戻ったタタールの家族がれんがを積んで、住宅を建てる光景が垣間見られた。

現在、クリミアの人口は約200万人。この30年にタタールは全体の12~15%まで増えて、彼らの多くは今、反ロシアのレジスタンス戦士として戦っている。

「イフタル」(イスラム教のラマダン中の日没後を取る食事)の夜、ウクライナのゼレンスキー大統領は彼らを前にクリミア奪還の誓いを新たにした。多くの国民がイスラム教徒であるトルコが、この戦争でウクライナを支持する理由もそこにある。

◆ロシア安全保障の要衝

他方、9年前の3月16日、ロシアのプーチン大統領はロシアによるクリミア編入を一方向的に宣言した。その日、数万のモスクワ市民が歓呼の涙を浮かべて赤の広場を埋めた。プーチン氏はロシア史上の英雄になった。

クリミアは、すべてのロシア人の記憶に刻まれた土地でもある。18世紀後半、ロシア・ロマノフ朝はクリミア・ハン国を打ち撃ち破ると、さらに南下を企てて、19世紀半ばにはトルコとイギリス、フランスを相手に、文豪トルストイも従軍したクリミア戦争を戦った。

ロシアは敗れたが、クリミア半島南西部にある軍港セバストポリスは、ボスポラス海峡をへて地中海につながる安全保障の砦(とりで)となった。そして今、西の飛び地カリーニングラードと南のシリアをカーブで結ぶ、対NATO(北大西洋条約機構)防衛ラインの中央にクリミアがある。

ウクライナがクリミア奪還の戦いを本格化させる時こそ、ロシアがこの戦争で初めて、国を挙げて一つにまとまる日になるかもしれない。ロシア国民はクリミア防衛のために立ち上がるだろう。

(にしたに・ともあき)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003